

表紙から



読書の秋です。今月の表紙の人は、ボランティアグループ伏古えほんの会「どんぐり」代表の吉田静子さん(55)です。

子どもたちに読書の楽しさを伝える



タマネギ栽培センター東区地区はこふに日曜日毎週水曜日には、毎月第一木曜日に開催されています。また、毎週水曜日には、毎月第一木曜日に開催されています。また、毎週水曜日には、毎月第一木曜日に開催されています。

伏古えほんの会「どんぐり」は、ふしこ地区センターと東苗穂児童会館で、子どもたちに絵本の読み聞かせをしているグループです。十三人いるメンバーのほとんどは、ふしこ地区センターで行われた読み聞かせ講座を受講した方々。講座修了後も活動を続けていこうと有志によるグループを結成して、もう十年以上東区内で活動を続けています。今まで子どもたちに読んで聞かせた絵本の数は、何百冊

のため、毎回本選びには頭を悩ませています。読み手の側も楽しんで読めるような本でなければ、子どもたちを引き付けるのは難しいようです。

読み聞かせをしている間、子どもたちは読み手を囲み、身を乗り出して一心に絵本を見詰めています。楽しい場面には大きな声で笑い、悲しい場面には真剣な表情でじつと聞き入っています。吉田さんが絵を指し示して「これ何だろうね」「これからどうなると思う」などと問い掛けると、子どもたちからすぐ反応が返ってきます。吉田さんは「このように、子どもたちとの一体感を感じるときが一番うれしいですね」と話します。

「私たちは子どもたちに本の紹介をしているだけです」。このように話すメンバーの皆さんは、子どもたち自身に、それぞれ自分の好きな本を見つけてもらいたいと願っています。

◆ ◆ ◆
子どものころの大好きな一冊との出会いは、大人になっても大切な思い出になります。読書の好きな子どもが増えて、豊かな心を持って成長してくれるといいですね。

ひがすとりー

第20回

村は家畜とともに
あのころは馬がいた(一)

タマネギと馬、切り離せない関係

農家の人たちはこんな話を残しています。「農家には最低一頭馬がいた。何をやるにも馬が必要なので、馬を大事にした」。馬がいなければ全く仕事にならない。タマネギの生産を続けられたのは馬がいたからだ」

明治から昭和にかけて、東区の前身である札幌村では特産物のタマネギが盛んに栽培されました。タマネギ栽培と馬の存在は切り離すことができません。まず馬は農家にとって大切な労働力でした。春に畑を起こす作業は重労働です。そこで、プラウ(洋式のすき)を馬に引かせて、人馬一体となって畑を起こしました。



タマネギを箱に詰め、馬に引かせて出荷します(明治末ころ)

また、馬は肥料の供給源でもあります。農家は、馬小屋の裏に馬ふんを積みその上に敷きわらを積

み重ねて、有機質に富んだ肥料を作りました。そんな肥料を畑に施すと、土は軟らかくなり、粒も砂のように細かくなって、タマネギ栽培に適したものになります。化学肥料は、高価であることに加えて、土を固くし、地力を消耗させることから、あまり使われなかつたそうです。馬ふんは、地力を維持し、品質の良いタマネギを毎年安定して収穫するために欠かせない肥料でした。

馬は休みなく働く

秋の札幌村は実りの季節を迎えます。タマネギ農家は総出で収穫作業に汗を流しました。収穫後のタマネギは、乾燥と選別の作業を経て箱詰めされます。箱は荷車に積み、馬に引かせて出荷します。十月から十一月にかけて、元村街道を通って、国鉄札幌駅近くの倉庫へタマネギを運ぶ馬の姿が見られました。

馬は冬も休みなく働きます。そりを引いて人や物を運んだり、国鉄苗穂工場で除雪をしたりして、農家の人たちに収入をもたらし、家計を支えました。